

第6学年 図工科 学習指導案

奈良教育大学附属小学校 教諭 小野はぎ

1. 単元名 自分だけの木箱

2. 単元の目標

- ・ 板材の構成や仕組み、バランスや奥行を理解する。
材料の使い方やつくり方を工夫して製作する。 (知識・技能)
- ・ 使う場面を思い浮かべて、入れる物や大きさを考え、見通しをもって作る。(思考・判断・表現)
- ・ 生活のなかで使えるものを、楽しみながら作る。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

今の子どもたちの周りには便利な物があふれ、自分で物を作る経験が少なくなっている。ことに木の工作は学校以外で経験することはないのではないだろうか。本校では4年以上の学年で木工工作にとりくみ、道具の扱いに慣れながら、少しずつ工程が複雑になるように系統的に、くらしのなかで使えるものを作るようにしている。4年で使う鋸、金づちに加えて5年では電動糸鋸を扱い、6年では蝶番を使うためドライバーを扱う。いずれもニスを塗って仕上げる。

道具の扱いや製作する技術だけではなく、例えば木目を断ち切るように切断する場合鋸は横引き(目の粗い刃で切る)にするなど、木材の使い方に合わせて木目を見て鋸の使い方を変えるように、木の特徴、道具の仕組みや使い方などを知る機会になる。身の周りの木製品に目を向けたり、物の仕組みや組み立てに関心をもったりと、関わらせて物事を見る力や視野を広げることにもなるだろう。林業や歴史とつなげて知識を増やす機会にもなると考える。

(2) 児童観

6年3組は明るく素直な印象のクラスで、かいたり作ったりすることに自信がもてない子もいるが、支えを求めて、支えられながら取り組もうとする。深く考えたり、粘り強く取り組んだりできる子が多く、苦手意識があっても投げ出さずに、自身の方法が合っているか確かめたり、こつを聞いたりしながら丁寧にやりきろうとする姿がある。

4年で文具立て、5年でブックエンドと木彫りのスプーンを作ってきた学年である。卒業生を兄・姉にもつ子の比率が高く、題材を知っている場合が多い。作品のイメージをもてるから前向きになりやすいと考えられるので、安全に道具を扱いながら楽しくとりくめるようにしたい。

(3) 指導観

何を入れて使いたいのか、どんな大きさにするか、自分のくらしのなかで実際に使用することを想定して設計図をかくことから始める。そうすることで意欲を持続させるとともに、長い工程のなかのどこを作っているのかを意識して、見通しをもってとりくませたい。

木材については、4年時に林業の学習をしたことを思いさせながら杉材の特徴を知らせ、木目や色の美しさ、やわらかく扱いやすいことを確かめたい。木の成長過程で年輪については理解しているが、木材に見える木目とのつながりについてはわかりにくいだろう。切断時、組み立て時には

年輪のできかたと木目の関係を考えさせたい。

道具は、既習の鋸、金づち、きり、釘に加えて蝶番、ドライバー、ねじを扱う。それぞれの用途や仕組み、扱い方の注意には見本を示しながら時間をかけ、安全にとりくませたい。乾燥によって木が反る可能性を考え、木表と木裏を見分け、反ってもはなれにくい組み立てができるようにする。その際、身近にある正倉院の宝物が良い状態で残っている理由のひとつとして、校倉造りに加えて唐櫃が破損せずに保存されていたことに触れ、組み立て方がよいと、長持ちするとともに中の物の保存状態にも影響することを意識させたい。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点 (見方・考え方)

相互性…箱としての丈夫さを考える時、木目ができるメカニズムと関わらせて組み合わせ方を決める必要があること。

有限性…限りある資源を意識し、自然の物から作られたものを大切に長く使うこと。

責任性…なかまと協力し合いながら、長い工程を経て最後まで作りきること。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

未来を予測して計画をたてる力

箱の完成までを見通して計画的に作業をする。

使用する木材から杉の栽培や伐採について考える。

多面的・総合的に考える力

木目から、杉の木の特徴や育て方など林業との関わりを考える。

正倉院の唐櫃によって宝物がよい状態で残ったことと関わらせて組み立ての重要性を考える。

使う道具の材料や作り手、歴史にも思いを馳せる。

他者と協力する態度

なかまと協力して組み立てる。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

自然環境、生態系の保全を重視する。

身の周りにある木の特徴を生かした作品や道具に目を向ける。

自然物でできた物に愛着をもち大切に長く使うことが環境を守ることにもつながる。

文化を尊重する。

木の特徴を生かした造形品、木造建築について、美しさだけでなく耐久性や先人の工夫に思いを馳せることで文化を守り継承する気持ちを培う。

・達成が期待される SDG s

無駄のない生産と消費への意識を高める。

限りある陸上資源を大切に使う意欲を引き出す。

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 杉材とシナベニアの組み合わせ方を理解している。 ② 杉材の特徴や木目について理解し、道具を適切に使用して製作している。 ③ たいこばりにすることの意味を理解して製作している。	① 使う場面を思い浮かべて大きさを決めている。 ② 自分で決めた大きさに合わせて、見通しをもって作っている。 ③ 互いの工夫や苦勞を知り合う（鑑賞）	① 入れる物を思い浮かべて、楽しみにしながら作っている。 ② 道具の使い方や組み立て方など、発見や気づきを増やしながら楽しんで作っている。

5. 単元の指導計画（全13時間）

次	主な学習活動	学習への支援	評価・備考
1	①箱の大きさを決める ・何を入れるか ・そのために必要な大きさは？	木材のサイズから最大の大きさを提示する	イ①
2	木取り・裁断をする ②木取り（杉） ・縦、横のサイズ ・板の厚みを考えた組み合わせ方 ・縦長か横長か正方形か ・正しく測る ③④裁断（杉） ・木目と鋸（縦引き/横引き） ・のこぎりで切断する	・協力してとりくませる ・定規、スコヤーを使用して、垂直に線を引かせる ・入れる物に合わせた形 ・年輪と木目のつながりを見せる ・切りやすい角度	ア① イ② ア② ウ①
3	組み立てる ⑤たいこばり ⑥⑦組み立て（杉） ・木表と木裏（杉） 乾燥したら木表側に反る ・長持ちする組み立て方	・くぎの位置 等間隔にする理由 組み合わせる板の厚みを考えて	ア③ イ②

	<p>木裏が外になるように組み合わせる</p> <p>⑧杉（側面）に合わせてベニヤ板の木取りをする→切断⑨</p> <p>⑩ベニヤと杉の組み立て 外と内、表と裏を決める 接するところに記号を書く くぎの位置に印をつける ・仕切りをつけたい場合はつける ・仕上げてみがかく</p> <p>⑪蓋とみに切り分ける</p> <p>⑫ニス塗り</p>	<p>・年輪のでき方 ・正倉院の唐櫃の話</p> <p>協力しながらさせる</p> <p>乾燥させて磨き、二度塗らせる</p>	<p>ア②</p> <p>ウ②</p>
4	<p>鑑賞</p> <p>⑬互いに鑑賞する</p>	<p>工夫したところ、苦勞したところなどを知らせる</p>	<p>イ③</p>